信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

３年１組

ぶーちゃんとのかかわりを通して
自らのくらしを豊かにしていく子ども

『いってらっしゃい　ぶーちゃん！！』

８月 24 日に１組にやってきたぶーちゃん。40 kgでやってきたぶーちゃんも、今では約 160 kgになりました。１月 18 日、ついにぶーちゃんの出荷の日がやってきました。前日の夜、いつものように豚小屋の閉めの作業を行っている時のこと。いつもであれば、豚舎の入り口を開けると、「ぶー」と鳴きながら私に近寄ってきて、水や餌をおねだりしてくるぶーちゃんですが、この日はいつもと違いました。豚小屋の中でずっと眠っていたのです。本来であれば、なかなか小屋に入らず、小屋を閉めるのに苦労するのですが、すんなりと作業が終わってしまいました。これがぶーちゃんとの最後の夜でした。

そして出荷当日の朝、毎日のように鼻で板を持ち上げて小屋から脱走しているぶーちゃんが、この日は、脱走せずに小屋の藁の上で大人しくしていたのです。この姿を見た A さんは、「ぶーちゃんきっと今日出荷されるっていうこと、分かってるのかもしれない」とつぶやきました。それに B さんは、「最後にみんなに迷惑かけたくないって思ってるのかもしれない」と反応しました。ここ数日、ぶーちゃんの出荷が近づくにつれて、休み中も含めて毎日多くの人がぶーちゃんとの触れ合いを求めてやってきたり、出荷用の檻が設置されたりしたこともあり、ぶーちゃんも何か異変を感じていたのかもしれません。豚という生き物は賢いとよく言われますが、私たちはぶーちゃんとのくらしの中で、人の気持ちや言葉を感じているであろう場面を多々目にしてきました。そんな賢いぶーちゃんは、今日がみんなとのお別れであることに気づいていたのかもしれません。

午前 11 時、水島牧場さん、高木建設さん、そして獣医の中川さんも来てくださり、ぶーちゃんをトラックに乗せる作業が始まりました。「子どもたちが騒ぐと豚がトラックに入らないので、子どもたちは遠くにいてほしいです」と水島さんや中川さんに言われたため、子どもたちは無事に檻の中に入ることを離れて見守っていました。水島さんから、「先生、大変な作業になります。なかなか入らない時は力ずくで入れましょう」そう言われていたため、子どもたちにとって緊張の瞬間でありました。重機で釣られた檻が、豚舎の中にゆっくりと入ってきました。ぶーちゃんは、興味津々で歩き回りながらその様子を見ていました。そして檻が中に入ると、なんとぶーちゃんは一人でゆっくりとその中に入っていったのです。ぶーちゃんは全く抵抗しませんでした。重機でトラックに入れられるまで、ぶーちゃんは檻の中でじっとしていました。トラックの荷台に乗ったぶーちゃんに、子どもたちはゆっくりと歩み寄ります。C さんが「ぶーちゃんお利口さんだったね。よく頑張ったね。えらいよ」と声を掛けました。出荷は午後のため、まだ出発はしないのですが、ぶーちゃんのこの光景を目の当たりにした子どもたちは、いよいよ出荷するということの現実味を帯びてきているようでありました。「ぶーちゃん、ぶーちゃん」と涙を流しながら、檻に入ったぶーちゃんに話しかける子どもたち。ぶーちゃんの表情

も、なんだか寂しそうに見えました。

午後１時 20 分。ぶーちゃんとの始まりの会（お別れ会）のスタートです。ぶーちゃんに向けて歌を歌ったり、手紙を読んだり、思い出をみんなの前で発表したり、子どもたちが考えて催したお別れ会。きっとぶーちゃんを笑顔で見送ってあげたいという子どもたちの思いがあったのでしょう。和やかな雰囲気で会は進んでいきました。そして、会も終わりみんなでぶーちゃんとの最後の集合写真を撮った後、水島さんから、「それでは、これからみんなの大切に育ててきたぶーちゃんを食肉センターへ連れて行きます」と言われた瞬間、子どもたちの空気が一気に変わりました。「ぶーちゃんありがとう」、「命のバトン受け継ぐからね」、「みんなの命になってね」、「ぶーちゃんのこと絶対忘れないから」、「心の中で生き続けてるからね」、「ぶーちゃん戻ってきてね。待ってるからね」、「いってらっしゃいぶーちゃん！！」と堰を切ったかのように、ぶーちゃんへの思いを伝えていました。トラックの荷台の蓋を閉めると、ぶーちゃんの姿は見えなくなりました。それでも声を掛け続ける子どもたち。すると、中から「ぶおお！」というぶーちゃんの声が聞こえてきました。D さんはこの声を聞き、「ぶーちゃんもみんなにありがとうって、行ってきますって言ってるように聞こえた」と涙ながらに話してくれました。ゆっくり走り出すぶーちゃんを乗せたトラック。ゆっくりその後を追う子どもたち。トラックのスピードが上がるにつれ、子どもたちの歩幅も大きくなり、最後は全力でトラックを追いかけていました。トラックが見えなくなるまで、子どもたちは「ぶーちゃん！！」と叫び続けていました。

子どもたちと私は、空っぽになった豚小屋を見つめながらこれまでの歩みを振り返りました。私たちが話し合ってきたこと、決断したこと、これまでやってきたことはどうだったのだろうか。その答えはどこにもありません。でも、ぶーちゃんに出会い、多くの人たちに出会い、一歩ずつ歩んできたこれまでの道のりは宝の時間だったと思います。一頭の豚の命が私たちに教えてくれたことを大切に、私たちは精一杯生きていこうと誓いました。

『おかえり　ぶーちゃん！』

きたやつハムで食品に加工されたぶーちゃんが約１か月の旅を終えて、２月 20 日、私たちの元へ帰ってきました。午後１時 40 分、ふと窓の外に目をやると、校門に一台の宅急便の車が入ってきました。「きた!!」と私が叫ぶと、一斉に教室から飛び出して行く子どもたち。「ぶーちゃん!!!!」と言いながら、宅急便の配達員の方に駆け寄っていきました。「私たちが運びます」と車のトランクに行き、商品が入った大きな段ボールをみんなで協力して教室まで運びました。E さんは「今、命を運んでいます」と慎重に歩を進めて行きました。F さんは「はじめてぶーちゃんを持ってるよ！今までは抱きしめることしかできなかったから」と笑顔で話していました。

全部で ８ 箱の段ボールを教室に運び入れると、自然と子どもたちから「おかえりぶーちゃん」という声があがりました。子どもたちの反応を見ていると、本当にぶーちゃんのことを愛し、心の底からぶーちゃんの帰りを待っていたのだということを感じました。そして、いよいよ帰ってきたぶーちゃんとのご対面の瞬間が訪れました。包装紙を剥がし、発泡スチロールの箱が現れ

ると、「わードキドキする」とＧさんが言いました。ゆっくり蓋をあけると、子どもたちが１枚１枚心をこめて手作りしたメッセージカードとぶーちゃんの写真が添えられ、姿を変えたぶーちゃんと再会をしました。ウインナーやベーコンなどに姿を変えたぶーちゃんを見た子どもたちからは歓声があがります。我先にと誰よりも前に出て、商品になったぶーちゃんを手にしたＨさんは、何度も何度も「おかえりぶーちゃん」と言いながら、ぶーちゃんを撫でていました。その姿が、これまで育てていた時によく背中を撫でていたＨさんの姿と重なりました。姿を変えても、思いは変わらない。私たちにとってのぶーちゃんなのだということを子どもたちの姿から感じました。Ｉさんは、「ぶーちゃんのことを食べてあげたい」とつぶやきました。「食べたいじゃなくて、食べてあげたいのはどうして？」と聞くと、「頑張って命のバトンを受け継ごうとしてくれたぶーちゃんだから、その命のバトンを受け継ぎたいから」そう答えました。「出荷する」という目標のもと、生産者の立場になり、命を守っていくことの大変さを学び、命の重みを感じてほしいと思っていた教師。しかし、子どもたちは命の大切さを学んだからこそ、「命をいただく」ということの意味を自分事として捉え、言葉だけでなく本物になっているように思いました。ぶーちゃんとの歩みを通して、ぶーちゃんから教えてもらったこと、学ばせてもらったこと。この１年間の活動に自信と誇りをもって、これからの生活にも生かしていってほしいと思いました。

本物の「いただきます」

「いただきます」この言葉をどんな思いで言っているだろうか。どんな気持ちが「いただきます」の中に込められているだろうか。道徳の時間に「いのちをいただく～みーちゃんがお肉になる日～」という絵本から、「いただきます」について考えました。（以下お話の概要）

子どもたちは、女の子の「おいしかぁ」と涙を流しながらも嬉しそうな表情でみーちゃんのお肉を食べる場面について考えました。女の子の「おいしかぁ」にはどんな思いがあるだろうか。そう問いかけると、子どもたちからは黒板には書ききれないほどの意見が出されました。

食肉センターに送られた牛のみーちゃん。送り出された日、小さいころからみーちゃんと一緒にくらしてきた女の子は、「ごめんね、ごめんね。みーちゃんがお肉にならないと、家族が暮らしていけない」と涙を流して寄り添う姿がありました。牛のみーちゃんは屠畜される日、涙を流し自分の運命を受け入れたかのように抵抗することなく屠畜されました。そして、みーちゃんが食卓に出てきても女の子は泣いてばかりで食べることができません。しかし、おじいちゃんから「みーちゃんのおかげで、みんなが暮らせてるんだ。みーちゃんにありがとうって言って食べてあげないと、みーちゃんがかわいそうだ」と促され、女の子は「みーちゃん、いただきます」と言ってそのお肉を食べます。女の子は、「おいしかぁ、おいしかぁ」と涙を流しながらも嬉しそうな表情でお肉を食べました。

・自分たちで育てたみーちゃんが、たくさんの人の命になって、おいしくなってよかった。
・みーちゃん、わたしの命になって、わたしの中で生き続けてくれてありがとう。
・わたしたちのためにありがとう。みーちゃん生まれてきてくれてありがとう。
・みーちゃんのおかげでみんなの命がつながっていく。命のバトン受けついだからね。　　など

子どもたちの発言は、もはや他人事ではなく、自分事としてのものでした。ぶーちゃんと暮らした5か月間、そして出荷して戻ってきたぶーちゃん。絵本の中のみーちゃんと女の子の中に、ぶーちゃんとわたしを照らし合わせながら語っていく子どもたち。Jさんは「ぶーちゃんを育てたことで、いただきますが本物になった」そう語りました。それに続いたKさんは、「命をいただくって当たり前のことではない。生まれてきてくれた動物、それを育ててくれた人、その思い、すべてに感謝してのいただきますなんだって思った」と話しました。そして、Lさんは、「ぼくは、すべてぶーちゃんだと思っていただきます」と話しました。「どういうこと？」と問い返すと、「だって、ぶーちゃんのお肉は絶対に残さないもん。捨てるところなんかない。一生懸命大切に育てた命だから。すべてがぼくの命になる」と答えました。ぶーちゃんは私たちに、本当の「いただきます」を教えてくれたんだと思いました。その日の給食の時間、子どもたちの「いただきます」はいつもと違いました。給食を見つめながら手を合わせる子、下を向き目をつぶって手を合わせる子、大きな声で「いただきます」を言う子。みんなが、今目の前の「命をいただく」ことに感謝をして挨拶している姿がありました。

本物の「いただきます」を感じた子どもたちは、いよいよ食品として加工されて帰ってきたぶーちゃんをみんなで食べる日がやってきました。粗挽きウインナーとレモンスパイスウインナーは85℃のお湯に2分入れてボイルし、ベーコンとハム、ボロニアソーセージはフライパンでお好みの焼き加減で焼いていただきました。心を込めた「いただきます」のあと、じっとお肉を見つめ、そしてゆっくり口にお肉を運ぶ子どもたち。「おいしいよぶーちゃん」「ありがとうぶーちゃん」とお肉を口にした子どもたちはみんな笑顔でぶーちゃんのお肉を食べます。Mさんが「先生、ぶーちゃんのお肉は甘いね。ベーコンから出た脂も一滴残らずみんなで飲み干したよ。ぶーちゃんは脂までおいしい」と、ぶーちゃんを最後まで大切にする姿がありました。Nさんは「ぶーちゃんの命のバトン、しっかり受け継ぎました。これでぶーちゃんはわたしの体になりました」と自分の体を抱きしめながら笑顔で話していました。

ぶーちゃんから学んだこと、教えてもらったことは私たちにとってかけがえのない宝物です。食べ物に対する見方が変わり、「命をいただく」ことを身をもって感じた子どもたちです。以前、Oさんが「食べることは、生きることだよ」と私に話してくれたことがあります。私たちは生きるために、様々な生き物や植物からその命をいただいています。大切に育てられた「命」のバトンを受け継いだ私たちは、自分の命も大切にして守っていきたいと思う、そんなぶーちゃんとの「命の学習」であったと、今感じています。